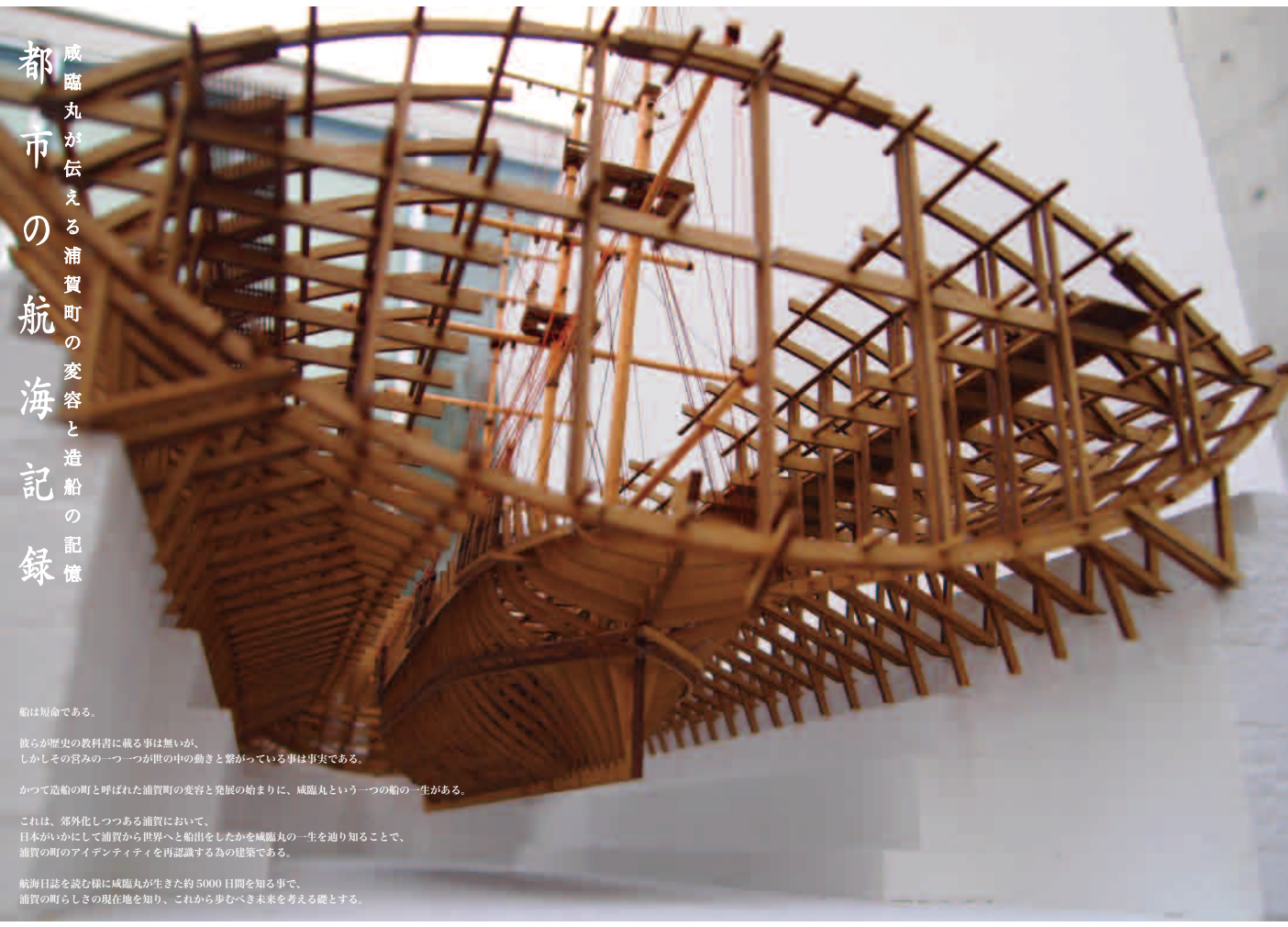


# 都市の航海記録

咸臨丸が伝える浦賀町の変容と造船の記憶



船は短命である。  
彼らが歴史の教科書に載る事は無いが、しかしその営みの一つ一つが世の中の動きと繋がっている事は事実である。  
かつて造船の町と呼ばれた浦賀町の変容と発展の始まりに、咸臨丸という一つの船の一生がある。  
これは、郊外化しつつある浦賀において、日本がいかにして浦賀から世界へと船出をしたかを咸臨丸の一生を通り知ること、浦賀の町のアイデンティティを再認識する為の建築である。  
航海日誌を読む様に咸臨丸が生きた約5000日間を知る事で、浦賀の町らしさの現在地を知り、これから歩むべき未来を考える礎とする。



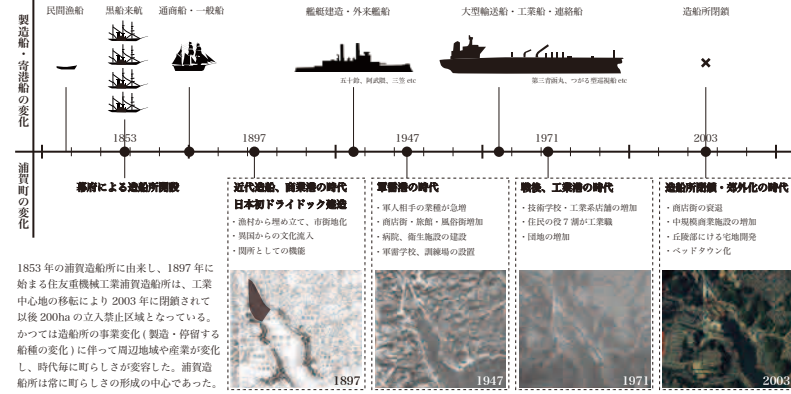
木造船技術を感じながら、船内に吊された史料を廻りによって見る



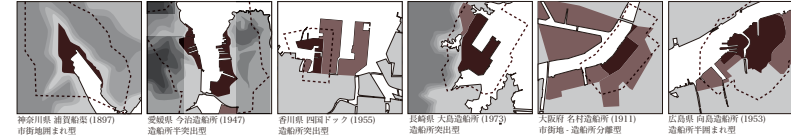
ドックの特異形状に応じる建築

## 1. 都市の核としての船

■船によって町らしさが変容した町 神奈川県浦賀



## 浦賀特有の地形が助長する造船所の中心性



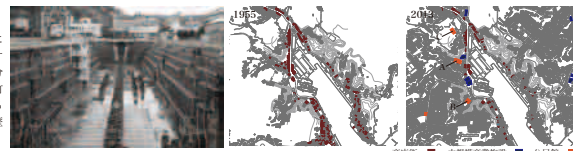
明治期に建造された造船所の多くが平坦な工場地帯や埋立地により市街地と距離を置くのに対し、浦賀は狭く急な谷戸地形である事から市街地と造船所が干渉空間無く近接する。他地域造船所と比べ、船の建造や入港、進水などドック内の活動が、ドック周辺地域の風景や活気に大きく影響し、景観的にも意識的にも中心となっていたと考えられる。



## 2. 船との関わりを失った浦賀/郊外化

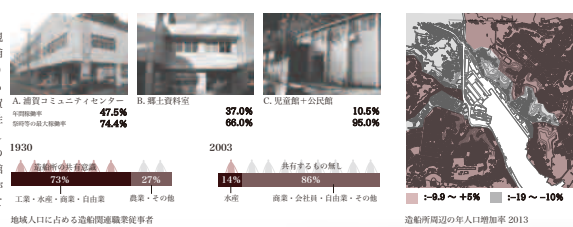
### 個性の薄れつつある歴史都市

浦賀造船所の閉鎖に加え、住宅地宅開発による地域の拡大や、衰退する商店街、増加する中規模商業施設により、賑わいの中心は分散している。中心性を無くし、個性の無い町となりつつある浦賀が再び個性を獲得するにはまず、浦賀の町がこれまで歩んで来た歴史を再認識する必要がある。



### 船に縁の無い現代

浦賀は旧市街地の整備でなく丘陵地帯の新規宅地開発によって人口を維持している為、浦賀に住みながら地域や造船の歴史に関わりの薄い住民が多く、造船所付近の旧市街地も高齢化により人口が減少傾向にある。横須賀市中心部に付随するベッドタウンとしての性格も強く、住民の業種も浦賀造船所が縮小していた時代と比べて造船に関わりの薄いものに変化している。既存の歴史資料館や公民館等も立地や機能不足等から稼働率や利用率が低く、史料を取載していないながらも活用できていない状態である。



近代化遺産として保護されるドライドック





